

チャリティーサッカー サッカーしかできなくても難民支援



東京ヴェルディ1969

「僕ら、サッカーしかできないけど、それで難民支援になるんですか?」

2006年3月、サッカー好きの戸倉さん(当時JEN職員)に懇願されてよみうりランドまで同行し、最初に東京ヴェルディ岸田広報部長(当時)に会った時、言われた言葉である。それから3ヶ月後の「世界難民の日」(6月20日)の前夜で、ホームゲームを難民のためのチャリティーサッカーにいただいた。試合前の電光掲示板の中で難民の子どもがサッカーボールを蹴る。DJが「今日は何の日か、知ってるかい?」と観衆に訴える。UNHCRやNGOの職員が募金を集める。ただサッカーを観戦に來ただけの人がたとえ一瞬でも世の

中の難民に思いを馳せる。そうやって、東京ヴェルディ1969とUNHCRとNGO(J-FUN)の協力は始まった。

「スポーツ」をキーワードに積極的に社会貢献を行っている東京ヴェルディ1969であるが、難民支援は、まだ手探りである。東京で助けを求めている人(例えば三宅島の避難民)もいるのになぜ難民支援なのか?社内のそんな声にも答えていかなくてはならない。それでも志は勝澤広報部長や谷さんに引き継がれ、今年もまた難民の日チャリティーサッカーを主催していただいた。難民フットサル大会(下記参照)のために選手のサイン入りサッカー用具を寄附していただき、難民の選手と家族300名を国立でのホームゲームに招待してくれた。

東京ヴェルディ1969のおかげでサッカーを通して難民を励まし、普通の人々が難民問題に触れる機会が増える。サッカーがいいんです、岸田さん。これからも宜しくお願いします。

関連情報:
<http://www.verdy.co.jp/>



©東京ヴェルディ1969

難民フットサル大会 One Ball, No Border



「世界難民の日」フットサル大会実行委員会

「今年は難民の選手も応援する家族も、僕らお手伝いする側もみんなが楽しめることを第一の目的にしたいんです」UNHCRに共催を持ちかけに來た主催者の一人である矢口さんは、祭りを前にした子どものように話していた。

難民であることは、苦しいことの方が多い。それは支援するNGOや市民団体にも言えることだ。だからこそ一日だけでも楽しいフットサル大会を開催したい。場所が昨年(2006年)のように日産スタジアムでなく板橋区の中学校でも、小雨がぱらつくあいにくの天気でも、岡田元全日本サッカー監督や宮崎京ミス・ユニバース世界5位

(2003年)も応援に駆けつけてくれて、難民の子どもと泥まみれになりながら行ったエキシビジョンも含めて、今年のフットサル大会は確かに楽しかった。UNHCR駐日事務所チームも、立ち上げたばかりのUNHCRユースの活躍もあり、1勝1敗1分と予選落ちながら善戦した。

楽しい一日のために、多くの関係者や選手たちが準備に練習に明け暮れた。フットサルは一日で終わっても、難民の人生もUNHCRやNGOの支援活動は続く。「だから一日だけの大会ではなく、試合の前の練習も、終わった後の付き合いも含めて、

フットサルを通じた難民と日本人の連携にしたいんです」と、矢口さんは言う。

One Ball, No Border!
難民フットサルのもたらす意味をしみじみと噛みしめている。



©UNHCR